＝前回までのあらすじ＝

『言弾遣い、それは言霊の力を弾丸に込め、戦う者の総称である。
数々の国が存在するこの大陸を統べる大国、言葉の国（ラングアゲ）。そこは言霊の力が強いため、それを操る者を養成する学校が数多く存在する。
その内の一つ、プレイネ地区第六言弾専門学校の校舎をケンカの流れ弾で壊してしまったのは、幼なじみな弔祇葬屋（とむらぎそうや）と悼颯火（いたみそうか）。彼らはその罰として遠方のキンディネスに飛ばされたが、逆言遣いと一戦交えつつも、仲良く悪態つきつつ、学校目指して旅をしていた。しかし、到着まであと少しのところで学校に帰るのを母校の教師、阿部猛（たける）に一服盛られて妨害され、キンディネスより遠い田舎町・ファーラまで戻されてしまったのだった…』

『そこで現れたのが俺達、異魂遣いこと互井霜一（たがいそういち）と蒼慈（そうじ）！　迷える子羊的な二人を優しく導き、学校へ送り帰したのだった！　そして、今回からは異霊遣いの俺達を主人公とした新たな物語が』

「「始まってたまるかぁああッッ―！！」」

「手前ら！　前回のゲストキャラの分際で、あらすじ説明してんじゃねぇよ！　改竄してんじゃねぇよ！　終わらせるんじゃねぇよ！」
「颯火の言う通りだ！　学校になんか着いてねぇし！　むしろ、お前らと戦ったりしたじゃねぇかよッ！　つか、霜一が主人公になったら絶対Ｚ指定入るから！」
『何だよお前ら、俺達のあらすじがあまりに完璧だったからって、そんな嫉妬しちゃってさぁ。ちょっと照れるな！』
「「何でだよっ―」」
『ほら、俺罵られて伸びるタイプだから』

「黙れ、変態！」
「死ね、ドＳ！」
『でも、前回に比べて簡潔で分かりやすい粗筋だったことには違いなギャヒッ！？』
「消え去れ、ショタ！」
「くたばれ、おさげ！」
『ちょ、待って止めて落ち着いて葬屋さん颯火さん銃はしまってこっちに向けないであのね違うの粗筋やったのは二人の仕事を減らそうという優しさからなの前回のお詫びなんだよだから銃に言弾込めないで引き金引かないでぇぇ兄さぁあああん！』
『よっしゃ、ばっちこーい！！』

《放送事故のため、一旦ＣＭ入ります》

『あ、ちなみに～、俺が主人公になったら、毎回村が一個消滅する殺戮紀行に…』
「「掲載できるかぁああああッ―！」」

と、馬鹿野郎が馬鹿みたいに馬鹿騒ぎする馬鹿話！
ＧＵＮ×ＧＵＮ☆ＢＡＮＧ×ＢＡＮＧ言葉遊び系ハイテンションガンアクション！
目で読むな！　心で聞け！　今回はそんな無茶振り的音楽小説？！
言弾シリーズ第三弾！

響け！

このあとすぐ！　テンションはそのまま！

爽やかな日差しの差し込む森の中。楽しそうな歌声とギターの軽やかな音色が響く。
「あ～た～らし～い～あ～さがっきた～♪」
「きぃ～ぼ～おの～あ～さ～ぁあ～だっ♪」
「「よろｋ「「うるせえええええええええええええッ！！」」
歌声を遮るように大声を上げて、薪を囲んで寝ていた葬屋と颯火は飛び起きた。目の下にはくっきりとくまの痕。睡眠による体力の回復がまるでうかがえない。
そんな朝から不快感全開な葬屋と颯火に、彼等の枕元でギターをかき鳴らしていた双子は逆に爽快感全開で問いかける。
「おっはー☆　二人ともッ！」「昨日の夜はよく眠れたかー？」
「そんなわけないだろ！」
「見りゃわかるだろッ！」
「うわ、何そのタトゥー！　パネェな！」「ヤベェ！　超カッコいいッ！」
「「くまだよトンチキツインズッ！」」
「うっそ、マジパネェわ！」「うっわ、マジヤベェわ！」
「「誰の所為だよッ！」」
素でむかつくテンションを繰り出す双子。彼等がこうしてはた迷惑なモーニングコールをするに至るまでの経緯を話すには、まず時間軸を昨日に戻す必要がある。

И

昨夜。
「遠くば声を音に聞け！」「近くば寄って歌を聞け！」
「音斬風刃（おとぎりかざは）！」「音斬雷人（おとぎりらいと）！」
「「音斬兄弟、ただ今参上！」」
タームから脱走してきた蒼慈（霜一）を捕獲するべくやってきたゼペット・パペットの登場後、そんなハイテンションな名乗りを上げながら葬屋と颯火の前に現れたのが彼等、風刃と雷人だった。互いに左右対称になるようにタトゥーを入れて、前髪で目を隠している。仲良くイヤホンを片方ずつつけ、その先は首もとのチョーカーへと繋がっている。
「この子達はね、蒼慈くんと霜一くんを止めるために連れてきたんだけど…、君達が相手しちゃったから、仕事なくなっちゃったねぇ」
「そうだ！　お前達が勝手に倒すから！」「俺達の仕事がなくなっちゃっただろ！」
「「だから勝負しろ！！」」
「支離滅裂だッ！」
えーいいじゃんよー、とぶーぶー駄々をこねる風刃と雷人。精神年齢が低すぎる。
そんな二人にゼペットは困ったように笑った。
「二人はねぇ、自分達の演奏を聞いてもらおうと、道中すごく張り切ってたから、ライブが中止になったみたいに落ち込んでるんだよ」
「とてもそうは見えないが…」
「テンション高すぎだろう…」
確かに、地面に置いたギターケースをリズミカルに叩いて『勝負しようしょっしょしょしょ勝負～♪』とＤＪごっこに興じている二人は落ち込んでいるとは言い難い。テンションが謎である。
「つか、演奏、ってどういうことだ？」
「「よくぞ聞いてくれたッ！」」
颯火の何気ない問いに、待ってましたとばかりに二人は勢いよく立ち上がり、揃ってギターを構えた。

「なぜなら俺達は！」「言霊をギターや歌にあわせて操る！」
「天下双児の歌武器者（かぶきもの）だからだ！」
ギュイーンと寸分の狂いもなく、全く同時にギターを掻き鳴らす。
「歌武器者か…、また変なのが出て来たなぁ、颯火」
「ああ、言霊って色んな使い方があるんだな、葬屋」
「はっはっは、すげぇなぁ」
「あっはっは、びっくりだ」
「「じゃ、そういうことで！」」
葬屋と颯火は全速力でダッシュ！　逃げる姿は脱兎のごとく！
「あ、ちょっと、二人ともっ！」
「もうタームのハッチャケ連中は沢山だ！！」
「やってられっかよ！　他を当たるんだなぁ！」
「眠たいしィ！」
「寝てないし！」
ばーかばーか！といつにもまして低レベルな悪態をつきつつ、一刻も早くこの場を離れんとばかりに、全力で走り去る二人。
ちなみにただ今の時刻午前３時。
お前らもお前らでテンション高すぎである。
そんな二人に慌てることなく、風刃と雷人はギターを掻き鳴らした。
「♪落～ちた落ちた」
「♪何が落ちた」
「「♪葬屋（颯火）！」」
ギィイイイン！
と、突然、走り行く葬屋と颯火の足元が割れ、大きな穴が現れた。
……え？
「「うわぁあああ！？」」
全速力の勢い虚しく、仲良く叫び声を上げながら即席落とし穴に落下！
どーん！　がらがら！　がっしゃーん！
…何処のギャグ漫画だ。
「な、ちょ、何だコレ！？　つか、重てぇよ葬屋！！　どけ！」
「無茶言うなッ！　てンめ、蹴んじゃねぇよこの微妙なバランスが崩れるだろッ！落ちるぞ！」
「はは、どうだ！」「思い知ったか！」
「「これが歌武器者の力だ！」」
「うるせぇ！　どうでもいいから助けやがれ！！　ああムカつく一発撃たせろ！」
「こら待て颯火止めろ！！　その体勢で撃ったら確実に俺に当たるからッ！」
「助けて欲しかったら！」「俺達との勝負を受けるんだな！」
「は、つか、マジその格好ヤベェ」「ほんと、その体勢パネェ」
「くっそ！　超むかつくッ！！」
ギャイーンとギターを鳴らしながら、二人を勝ち誇ったように見下ろす風刃と雷人。
そんな双子を組体操もびっくりな体勢で恨めしそうに睨む葬屋と颯火。
なかなか間抜けな図である。
「まぁまぁ、みんな落ち着いて～」
と、剣呑な雰囲気を和らげようとゼペットは言った。
「あの、葬屋くん颯火くん。悪いんだけどさ、この子達のお願い聞いてくれないかな？」
「なんで！？」

「どうして！」
暗い穴の底から鋭い視線が突き刺さるも、たじろぐことなくゼペットは続ける。
「…実は、二人は蒼慈くん達を止めるために私が無理矢理連れて来たようなものなんだ。だから、私に免じて、どうか相手してやってくれないかな？」
「そんなこと言われてもなぁ…」
「俺達そもそもただの学生だしなぁ…」
ただの学生は校舎を破壊したり、ターム脱走者と戦ったりしない。
渋る二人に、ゼペットは聖母の微笑みを浮かべて言った。
「勝負を受けてくれたら、私の車でニアラまで連れていってあげるけど？」
「うけます！」
「やります！」
即答だった。
分かりやすい野郎である。
「あっくん、二人を助けて上げなさい」
「了解」
爽やかな笑顔のゼペット一声かけると、霜一を止めたあの奇妙な衣装の少年が現れて、二人に手を伸ばした。
途端、ぬっと袖が伸び、驚く葬屋と颯火を搦め捕って勢いよく放り投げた。
「救出」
「「は？　あ、あああああああ！？」」
本日二度目の落下。どーん！　がらがら！　がっしゃーん！！
なんだろう、この立て続けにおこる超現象。
そして、穴に落ちた時より痛そうな音とともに着地。確実に救出ではない。
と、そこへ、かわいらしいウサギの人形（に封印された霜一）を抱えた蒼慈が現れ、大の字になって伸びている二人を覗き込んだ。
「……大丈夫ですか？」
「ンなわけあるかァアッ！」
「って、蒼慈まだ居たのか」
「いたよッ！」
「てか、何なんだよ、アレ！」
「ああ、その子は人型の悪言（あこ）だよ。ゼペットさんは悪言の有効利用を研究しているから、試用も兼ねていつも連れ歩いてるんだ」
「悪言のエキスパート？　あの人がなぁ」
『つーか、ただの変態だって。悪言が大大大好きとか、正気じゃないぜ』
「うっわ、霜一！　お前その姿でしゃべるな！　気持ち悪いッ！！」
『んなこと俺が一番知ってるっての！』
「なんだい霜一くん、変態とは失礼だなぁ。私は全身全霊で悪言を愛しているだけさ。ただちょっとその愛が人へのソレより勝っているってだけの話」
『ほォら、やっぱ変態じゃねぇか。よ、気持ち悪いぞ！』
「あはは、人を虐めて愉しんでる君に言われたくないな」
『はっ、しかたねェだろ、悪言の影響なんだからよォ？』
「うん、知ってるよ？　だから私は君のそういうところだけ好きなんだ」
『だっかっら、それが気持ち悪いって言ってんだよッ！』
「なぁ、勝負できるぞ、雷人！」「うん、やったなぁ、風刃！」
「わくわくしてきたぁ！」「ドキドキしてきたぁ！」
「チューニングできてるか！？」「発声練習したか！？」
「ヤベェ！」「パネェ！」
思い思いに騒ぎ立てるタームの面々。

その声とギターの音を遠く聞きながら、二人はぼんやりと空をみあげる。
「ああ…、何でこんな目にあってるんだろう…」
「きっと、目が覚めたら全部なくなってるさ…」
「夢かぁ」
「悪夢だ」
おやすみなさい。ぐー。
空はもう薄っすらと明るみ始め、星も月もまた光の中に消えていこうとしている。
時刻はもうすぐ午前四時。

И

「で、今何時だよ」
「「六時半デス☆」」
「二時間しかたってねぇだろうがあああああッ！！」
というわけで、回想終了。
おはようございます。朝です。
「もっと寝かせろよ！　こんな状態でお前らみたいなハイな奴とやりあえるかよ！」
「俺達は基本学生なんだよ！　手前らとドンパチやるのが仕事じゃねぇんだよ！」
ドンパチやって校舎を壊したくせに、よく言う。
「だってラジオ体操なんだから！！」「六時半に決まってるだろッ！？」
「勝手に二人で体操してろよ、ハイテン双子ッ！」
「俺達を巻き込むな！　ヘンテコギタリストめ！」
「「違う！　歌武器者だッ！」」
「「黙れ！　傾不奇者がッ！」」
無駄にコンビネーション抜群な四人である。打ち合わせでもしたかのようだ。
「本当、君達は似てるね～」
さきほどまで葬屋達のように寝ていたのか、眠たそうに目をこすりながらゼペットが言った。
「「こんな奴らと一緒にすんなッ！」」
それを二人は全力で否定。至極嫌そうである。こういうのを同族嫌悪という。
一方で双子は、
「おい雷人、俺達似てるってさぁ！！」「マジでッ！？　超嬉しい！」
「お前ら二人がじゃねぇよ！」
「しかも手前ら双子なんだから似てて当たり前だ！」
「当たり前じゃないぞ！」「双子だって少し違うんだからな！」
「例えば？」
「「タトゥーとか？」」
「人為的だろ！！」
「つか、お前ら利き腕違うだろ。ギターの向き違うし」
「……あ、本当だな！」「おお、マジだ！　ヤベェ！」
「今更かよ！」
「でも、お揃いがいいよなぁ！」「そうだそうだ！　何で逆なんだふざけんなよ！」
「謎なキレ方すんな！」
と、その時、かけっぱなしになっていたゼペットのラジオからラジオ体操第一が流れ始めた。お馴染みの音楽が森の中に響く。
「あ、始まった！」「俺達も始めようぜ！」
すると、風刃と雷人は目配せもせずに、同時にギターを構え、コードの先をスピーカーではなく自分のチョーカーに差し込んだ。

そして、手を振りかざし、叫んだ。
「「♪破壊活動第一イィッ！！」」
ギュイーン！
と、ギターを一吠えさせると、ラジオ体操のＢＧＭのロックアレンジを引き始めた。
「何だァ、突然！？」
「楽しい！」「愉しい！」
「「バトル（ライブ）の始まりだァアッ！！」」
そう、驚く颯火達よそに、二人勝手に盛り上がりギターを掻き鳴らす。二人の動きには寸分の狂いもない。
「♪まずは身体を伸ばして」
「♪引き裂く運動からぁ！」
「「♪サン、ハイ！」」
風刃と雷人の掛け声と同時に、青々と生い茂っていた木々の枝や根が伸び、刺し殺さんとばかりに颯火と葬屋に向かって行く。
「しまっ…！！」
《母なる大地に抱かれて眠る》！
葬屋はとっさにライフルを足元に向け発砲。高らかな銃声とともに、周囲の土が立ち上がり枝や根を受け止めた。
言弾は言霊をつめた弾丸。土に流し込むことで変化させることも可能である。
そして、それを広範囲にむけてやっているのが、
歌武器者。
「行くぞ、颯火！　《跳べない鳥の翼は高く》！」
「くっそ！　ライティ！　《大地散消（さんしょう）》！」
土の壁が第二派で崩れる前に、葬屋は颯火を抱えて跳び上がり、颯火は銃を構えた。
バン！　バン！　バン！
リズミカルに放たれる言弾を受けた枝や根が霧散する。しかし、それ以上の量が二人に迫ってくる。
風刃達の演奏に合わせるように。
「♪次は～身体を縛って」
「♪吊るし上げる運動！」
「「♪サン、ハイ！」」
楽しげな双子の声と共に、枝や根はまた速度を増し、さらに木に絡まっていた蔦までもが立ち上がり葬屋と颯火を追う。
「うっわ！」
迫り来る枝を言弾で弾き飛ばしながら逃げるも、まるで埒があかない。余りの早さに足を取られるも、間一髪言弾で抜け出しているといった様子で、完全に劣勢だ。
「颯火！　少し時間を稼いでくれ！」
「ったく、無茶言うなよなぁッ！」
葬屋はそう一声かけると立ち止まり、ライフルを地面に起き、射撃体勢を作った。
そして、朗々と言弾を紡ぐ。
《この世に生きる》《全ての者よ》《この世に死せる》《総ての物よ》《蒼き月へと響く》《追悼の言の葉に》《その身を砕け》…」
「♪壱（いち）、弐（に）ー、惨（さん）、死（し）ー！」
「♪伍（ご）ー、六（ろく）、死地（しち）、鉢（はち）！」
ギターの音が激しくなり、ここぞとばかりに葬屋を狙う。そこへすかさず颯火が立ち塞がり、襲い掛かる全ての枝を撃ち落とす。
ギターと銃声の奇妙なアンサンブルが森を包む。
「…《水は枯れ》《木は朽ち》《地は割れ》《風は凪ぎ》《空は荒れ》《人は滅ぶ》《歎き

の声と》《破壊の音色が》《終焉を紡ぎ》《声は高らかに》《終わりを歌う》！」
葬屋は一息で言うと、ライフルの引き金を勢いよく引いた。
「《万物よ宇宙(そら)に散れ》ッッ！」
爆発のような激しい銃声が響き、ライフルから発射された光線が枝も根も蔦も、全てを消し飛ばしていった。
校舎崩壊の一因とされるケンカの流れ弾、《万物よ宇宙に散れ》。
そりゃあ校舎も全壊するって。
「っっっぶねぇーッ！」「もう少しでギターもやられるところだったぜ！」
ぶはぁ、と木っ端みじんになった枝の中から同時に顔を出す風刃と雷人。
「それによ、曲の途中で攻撃とかさーッ！」「空気読めよーッッ！」
「お前らにだけは言われたくねぇ！」
「♪葬屋くんのいけずーいけずー」
「♪葬屋くんのいけずートンチーンカン！」
「やかましい！」
そう、べんべんギターで『メリーさんの羊』を弾きながら、それに合わせて不平を言う双子は、はたと気がついたように勢いよく立ち上がった。
「よし、じゃあ第二幕いこうぜ！」「童話替え歌イエーイッ！」
ハイタッチすると、風刃はギターをしまい、代わりにスタンドマイクを取り出し、ギターと同じようにチョーカーにプラグを挿した。どうやらチョーカーは身体をスピーカー代わりにする仕組みになっているらしい。
風刃の準備が出来たのを確認すると、雷人はギターを弾き始める。
曲は『もしもし亀よ』のロックアレンジ。
「♪天まで響け　鳴り響け！
　地平の果ての　貴方まで
　遮るものは　何もない！
　破壊の刃を　歌うのだ！」
曲に乗せて、ノリノリ歌う風刃はそこで一旦大きく深呼吸。
「っっっあああぁぁあああぁぁあああああああああッッッッ！！！！！」
そして、力の限り叫んだ。
すると、その声が鎌鼬のように風の刃となり、葬屋達に容赦なく切り刻んだ。
「ったぁああ！　俺の学ラぁぁああン！　裂けたーッ！」
「ブレザぁああ！　てめ、この、高かったんだぞッッ！？」
あちこち斬られておきながら、自分の体より服の心配なのか。馬鹿か。
二人は服の恨みと言わんばかりに、即座に銃を構えなおす。
「ライティ《風林火斬》！　レフタ《惨々午後》、装填っ！」
「《風を裂いて地を砕け》！」
弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾(ダダダダダダダダダダ)ッ！
力強い銃声がギターを掻き消すほど響く。しかし、
「♪あっちでバンバン　こっちでドンドン
　撃っても撃っても　まだ弾切れぬ
　歌は刃となり　空駆け巡る
　風は全てを薙ぎ払う！　イェイ☆」
『雪やこんこん』のアレンジに乗せて歌う風刃の声は、風の壁となって言弾を全て弾き飛ばし、さらに刃として全てを切り刻んでいく。
「くっそォ、こんな戦闘狂に付き合ったばっかりに服も体もズタボロだよ畜生！」
『はっはっは、ざまぁ！！』

「良い気味ですね！」
「外野は黙ってろ！」
安全な場所でうさぎの縫いぐるみこと霜一を抱えて愉快に観戦中の蒼慈。負け惜しみ全開である。いちいちむかつく兄弟だ。
そんな二人を睨んでから、颯火は葬屋に叫んだ。
「おい、葬屋、俺達も歌武器者になるぞ！」
「はぁッ！？　何言って……いや、なるほど、そうか。分かった」
颯火の端的な言葉に納得したのか、葬屋は銃撃の手を止める。
「何だ何だぁ！？」「気にすんな雷人！　次、行ってみようッ！」
そして、曲が変わり、『花一匁』のアレンジが響くと同時に、葬屋と颯火は風刃よりも早く口を開いた。
「「♪双子の片割れちょいと来ておくれ」」
「♪銃が怖くて行かれない　…って、ええッ！？」
困惑する風刃に構わず、二人は続ける。
「♪ギター壊してちょいと来ておくれ」
「♪ギター大切　行かれない！」
「♪マイク壊してちょいと来ておくれ」
「♪マイク需要　行かれない！」
歌は響いても、不思議と風は起きない。
そう、歌武器者は歌で言霊を遣う。曲（コトダマ）の主導権奪われれば、操ることはできない！
「「♪あの子が欲しい！」」「♪あの子じゃ分からん！」
「「♪この子が欲しい！」」「♪この子じゃ分からん！」
「「♪相談しようそうしよう！」」
「行け、颯火！！」
「任せろ、葬屋！」
途端、颯火は駆け出し、曲の主導権を奪われ茫然とする風刃を蹴倒した。間奏の間では歌で言霊をつむぐことも出来ない。そのまま、颯火は銃を風刃の首元に突き付け、
「♪決ぃまった！」
口の端を歪ませて、嗜虐的に笑った。
リスペクト、霜一。
ハイテンションを貫いていた風刃も思わず青ざめる。
「♪風刃が欲しい！」
「♪そ、颯火がほ　…うわぁあぁぁッ！？」
「か、風刃ァ！！」
ダァン！
笑顔のまま引かれた引き金。と、次の瞬間、風刃はいなくなっていた。
「あ…、あああかざはぁあああッ！？　こここの人殺しぃいい！！」
「この世から消したわけじゃねぇよ！　あっちだ、サウスポー野郎」
気だるくいいながら、颯火は後ろ、葬屋のいる方を指差す。
そこには首根っこを掴まれ、青い顔で震えている風刃が。
自分達がキンディネスに飛ばされたように、言弾によって風刃を転送したのだった。
「♪勝って嬉しい花一匁　…って奴だな」
「らいとぉお！　イヤホンもギターもないよどうしよう！　何にもできないよッ！」
勝ち誇ったように言う葬屋と、絶望に暮れる風刃。
「どうだまいったか、トンチキツインズ！　お前ら、どうせ二人でしか演奏出来ないんだろ？　こりゃあもう俺達勝ったも同然だな！　なぁ、葬屋？」
「ああ、まったくだ。もう諦めて降参しちまえよ。俺達眠いしさっさと帰りたいんだよ学校に！　なぁ、颯火？」

「うわぁ、タームで負け無しの音斬が黒星かよ…、ほんとあの二人何者だァ…？」
「化け物なんじゃないかな。兄さんを負かすくらいだもんな…、音斬さん達が負けても仕方ないよね…」
「…で、そういうわけだから、雷人くん。勝負はこの二人の勝ちってことにしよう？　もう、イヤホンも繋がってないし、無理しない方が…」
音斬側の負けモードが漂う中、ゼペットが慰めるように言う。しかし、雷人は俯き、歯を食いしばりながらも、ギターを構え直した。
「……できる、さ…風刃と繋がってなくたって……ッ」
風刃の外れたイヤホンをもう片方の耳に当て、雷人は力強くギターを掻き鳴らした。
「♪負けて悔しい花一匁ーッッ！」
「ら、らいとォ！？」
突然叫び出した片割れに、驚く風刃。しかし、その声すら雷人には届いていない。
「五月蝿い、五月蝿い！！　お前ら赤の他人のくせに何で俺達よりコンビネーションいいんだよッ！？　俺達は双子なのに、何でいつも噛み合わないんだよッ！　悔しい、悔しい、悔しいッ！　お前らなんかに負けてたまるかよォオ！」
「噛み合わない、だァ…？　あれだけハモってたじゃねぇか」
葬屋は、発狂したように叫び続ける雷人の言葉に首を傾げた。確かに、二人の動きは噛み合わないどころか、寸分の狂いもなかったはずだ。
そんな葬屋に、風刃は俯きながら、呟くように言った。
「…俺達は、もともとはすごく噛み合わない双子なんだ。台詞はズレるし、テンポよく会話なんて出来ない。演奏も合わない。見た目はまるで一緒なのに、何故か噛み合わない。同じで居たいのにさ。で、そのジレンマに耐え切れなくなって狂って暴れまくったらタームに連れてかれちまったって、ワケ」
まるで左右対象。
どこまでも同一で、しかし、どこかが違っている。
双子といえど、決して同一ではない。
その些細な差が、同一を求める双子の間に溝を生み、発狂にまで追い込んだのか。
「あのイヤホンは俺達の意識を繋げ、同一化するための道具ってこと。あれがなければ、俺達はただのバラバラ双子さ。はっ、パネェぜ…」
自嘲気味に言う風刃に、雷人はマイクのコードをチョーカーに差し込みながら、
「まだ勝負（ライブ）は終わってない！　俺（カザハ）を返せェエ！　手拍子足拍子でアンコールだァ！」
イヤホンが外れた影響か、テンションは振り切り、支離滅裂に叫んだ。
「雷人くん！　無理したら危ないって！！」
「あーアーＡＨー！　あ～あ～」
雷人がゼペットの忠告も聞かずにマイクテスト。すると、雷人のテノールが徐々に電波系の声へと変わっていく。
「よぉし、お前ら耳の穴かっぽじって聞けヨ☆　イェイ☆★」
「な…、あの声どっからでてんだ…？！」
「流石、雷人（オレ）！　カッコ可愛いぜ！　パネェ！」
「言いつつなんで耳栓をするんだ…」
ざわつくギャラリーに見向きもせず、雷人はギターを構え直した。
「はぁ、副作用が残っても知らないからねぇ…」
ため息をつきながらゼペットが耳を塞ぐと、雷人のギターが吠えた。
「♪脳しょうぶちまけ咲かせてよ　私の好きな赤い花
冷たくなってもいつまでも　あなたは私のお友達
捨てず大事にしまっておくよ　花咲く冷たい土の下
ああ、あなたを

吊して潰してバラして均して燃やして晒して絞って撃って蹴って削って縛って殴って
踏んで挟んで刻んで溶かして轢いて落として殺して愛してあげる！　何度でもオっ
私の気が済むまで　私が私であるため
捕まえたら　逃がさない　愚かなつみびとっ
そう！あなたを

以下略

耳に残る電波系の声で熱唱する雷人。
枝が立ち上がるわけでも、鎌鼬が起きるわけでもない。
しかし、精神的に、破壊力抜群である。
「な、ぁあああッ！　頭割れるぅあああ！」
「ソーウアナタヲ…ってああ駄目だ離れない曲が頭から離れないぃぃ！」
二人して頭を抱える颯火と葬屋。頭痛、目眩、吐き気、耳鳴り、立ちくらみ。強すぎるダメージに混乱状態に陥っているようだ。捕らえていた風刃も野放しである。
「風刃ぁッ！！」
「雷人ぉッ！！」
ガシィ！
その隙をついて、双子、再集結。
イヤホンを片方ずつつけて、ギターを構えて、コードを挿したら準備オーケイ。
「音斬風刃！」「音斬雷人！」
「「歌って踊ってアンコールッ！！」」
ギュイーン！
勢いよくギターを鳴らし、弾き始めたのはパンクでロックなオリジナルの曲。
これで彼等は歌の主導権を奪われることはない。
音楽に乗せて、地面が割れ、蔦が走り、枝が伸びる！
防ぐ術は、ない。
「…颯火、いつか学校で創作ダンスを二人でやらされたの、覚えてるか？」
「ああ、他の野郎が女子と組んでるってのに、余ったからって男二人で組んだやつな」
「でも、俺達一位だったもんな！」
「羨ましくなんかねぇからなッ！」
「本領発揮さッ！」
「ショータイム！」
二人は足でリズムを取ると、枝が襲い掛かると同時に駆け出した。また逃げ回るだけの振り出しに戻ったのかと思えば、違った。
タッタタン　タタンタタン　タッ
タタンタタッタ　タタンタッタ
言弾を双子の音楽に合わせて放つ。銃声によるエイトビート。
ステップは軽やかに、踊りながら攻撃を避ける。
歌武器者は音で言霊をあやつる。全ては『音楽』による影響なのだ。
ならば、やみくもに対抗せず、音に入りこみ、調和してしまえば…
打ち消すことは出来なくても、受け流すことはできる！
「くっそ、何で！　何でだよ！」「曲は知らないはずなのに！」
「「何でそんなに噛み合うんだよォ！！」」
弾きながら叫ぶ双子。次々と襲い掛かる蔦も枝も、二人には届かない。
「俺達はなァ、確かに赤の他人だけど、幼なじみなんだよ！」
「つるんでる期間だったら手前らにだって負けねェぜッ！！」
「だけど、お前らとは一つだけ決定的に違うんだよ！」

「そうさ！　いくぞ、葬屋！　《テーマコンボ》！　《オンザロック》！」
説明しよう、テーマコンボとは、同じような言葉を連続させると力が強くなるという言弾の性質を利用し、しりとり形式で言弾を繋げていくというものだ。
そして、オンザロックとはその名の通り…
「信じてた　信じ合えた　あの頃は　もう、戻らな『い』！」
「いつの日か　巡り会う　希望さえ　掠れ、始め『た』！」
「戦いも　憎しみも　悲しみも　刹那（せつな）」
「何にも　残らないか『ら』」
「楽にして　別れの　時（とき）」
「君の顔が消えな『い』―ッ！」
音楽に合わせてコンボを繋ぎ、即興で歌詞もメロディも作り上げる。
銃は絶えずリズムを取り、なかったはずの歌が歌われる。
奪われるはずのない主導権（イニシアチブ）。それがどちらにあるかなど、明白だった。
「Is it a dream?　It is a dream!　信じない！　君がいな『い』！」
「Is it a fact? It is a fact!　許せない！　戻れな『い』！」
「いつか　君と見た　あの景色さえ遠く『て』…」
「手を伸ばしても　届かな『い』！」
「生きる　意味を問『う』」
「Where is light?　Who is the righ『t』?」
「Trick or treat!　Bark to dar『k』!」
「Kiss to the dead!　Give me the righ『t』!」
「twilight. Yeah! Try righ『t』!」
「To win the gam『e』!」
「Elect! Select! So sing that song　agai『n』!」
歌が終わると、自然とギターも止んだ。
枝も蔦も、すべて動きを止めていた。
歌武器者、完全攻略。
風刃と雷人は愕然として、その場に座り込んだ。
「何が足りないって言うんだよッ！」「どうしたら、そんなにッ！！」
「「同じになれるんだよッ！」」
双子だから、見た目も一緒なんでも一緒。それなのに…
子供のように泣きじゃくる双子に、葬屋と颯火はため息をついた。
「その、同じになろうってのがいけないんだよ。」
「あー、ほら、ギターにだって、リードとベースがいて、一つの曲を作るだろ？」
「手前等は、同じパートを同時に弾こうとしてるんだよ。それじゃあずれは目立つし、ハーモニーなんか生まれねぇよ」
「お前等は見た目は同じだけど、個性がそれぞれ個性があって、それを潰して他人と同一になったところで何の意味もないさ。あー、つまり、なんていうかな…」
「二人で一人なんじゃない、二人で一つなんだよ」
葬屋の言葉に、双子は納得したように笑った。
「「はっ、なぁんだ、そんなことかよ！」」
イヤホンはもう外れていたのに、息はぴったりだった。
颯火と葬屋は顔を見合わせて、苦笑した。

И

「なぁなぁ、バンド組もうぜ！」「組もうぜ！　組もうぜッ！」
「「はァッ！？」」
勝負に付き合ってくれたお礼として、約束通りゼペットの車でニアラまで送ってもらうことになった二人。阿部にファーラまで送り返されて依頼、復讐兄弟とバトルしたり、戦闘狂双子とバトルしたり、災難続きであったがやっと学校へと帰れそうだ。
「いいじゃねぇかよ！　俺達、お前等の歌に感動したんだよ！」
「そうだそうだ！　ハモリ具合とか、もうビビビーッってキタね！」
「「だからバンド組もうぜ！」」
「何で手前らって突拍子もないことばっかり言うんだよ！」
「お断りだ！　お前らとバンド組むってことは、そのままタームに直行だろう！」
「いいじゃん、ターム生活！」「勉強もテストもないし楽しいぜッ！」
「「よくねぇッ！」」
後部座席で騒ぐ四人対して、助手席に座らされた蒼慈は憂鬱そうに呟く。
「ああ…、なんで僕あの人たちにケンカ売っちゃったのかなぁ…そうじゃなかったら、今頃村のやつら全員皆殺しにしてたのに……」
『まったくだな！　本当にあいつらただの言弾専門学校生かよ。場慣れしすぎ』
「だてに俺達、実習と称してあっちやこっちに吹っ飛ばされてないぜ！」
「今回ので、学校から追い出されたのって十回超えたんじゃないか…？」
『何でお前等、退学になってねぇの？』
まったくだ。

「はい、着いたよー」
そうして、一回ガチで戦ったとは思えないほど仲良く六人で騒ぐ内に、一行はニアラに到着した。
「二人とも、これ。風刃くんが服破いちゃったでしょ？　これで買いなおして」
「こ、こんなに…！　流石、タームといえど管理職。懐の大きさが違うな…！」
「お前は一言多いんだよ、颯火。じゃ、ありがとうございましたー」
「はい、お疲れ様。この糞餓鬼くん達は僕がしっかりしごいておくからー」
『はぁ、俺、お仕置きはする趣味はあっても、される趣味はないわー』
「そういうの、聞いてないからね、霜一くん？」
ターム一行に見送られながら、都会の人ごみの中へ消えていく颯火と葬屋。
その背中が見えなくなると、ゼペットはため息をついた。
「どうした」
「ああ、あっくん。あの子達さ、言弾遣いだけど結構面白い子達だったじゃない？　だから、タームに来てくれれば、もっと研究がはかどるのにな、って思ったの」
タームは、表向きは問題児収容所なのだが、裏ではその中から変わった言霊の使い方をするものを引き抜いて、エリートとして要請しつつ、言霊の研究に役立てる、という二面性のある施設なのだ。なので、おいそれと人を連れて来られないのだ。
「ん、でも、それ、出来るんじゃないかな？」
『ああ、そうだなぁ』
残念がるゼペットに、蒼慈と霜一は今こそ復讐の時とばかりに嬉しそうに言った。
「『だってあいつ等、問題児だぜ？』」

《言弾シリーズ　次回でついに最終回？！》
《Endless…》